

「イスラエルに対する戦い（1）」

黙 12：1～6

1. はじめに

(1) キリストの再臨の前に何が起こるかを見ている。

①10章～14章は、挿入箇所である。

*物語の進展はなく、状況の説明が入る。

*7章と同じである。

*例外は、11：15～19（第7のラッパが吹かれる）だけである。

*第7のラッパの内容は、黙 16：1～21で啓示される。

②黙示録全体の中で12章が最も多くの象徴（シンボル）が登場する章である。

(2) 12章～13章に登場する7人の主役たち（大患難時代の後半）

①ひとりの女：イスラエルの象徴

②赤い竜：サタンの象徴

③男の子：キリストの象徴

④ミカエル：天使長

⑤女の子孫の残りの者：レムナント、真の信仰者たち

⑥海から上って来た獣：反キリスト

⑦地から上って来た獣：偽預言者

(3) 12章で、ヨハネは、サタンとイスラエルの戦いの歴史を振り返り、大患難時代に起こることを預言している。

2. アウトライン

(1) ひとりの女（1～2節）

(2) 赤い竜（3～4節）

(3) 男の子（5～6節）

3. 結論

(1) 悪霊どもの活動について

(2) サタンがイスラエルを破壊しようとする理由について

イスラエルに対する戦い（1）について学ぶ。

I. ひとりの女（1～2節）

1. 1節

Rev 12:1 また、巨大なしるしが天に現れた。ひとりの女が太陽を着て、月を足の下に踏み、頭には十二の星の冠をかぶっていた。

(1) 「巨大なしるしが天に現れた」

- ①これは、「大いなるしるし」(口語訳)である。
- ②「しるし」とは、神がなそうとしておられることの象徴である。
 - *多くの場合、預言的内容が含まれる。
- ③ここでの「しるし」とは、「ひとりの女」のことである。
- ④「しるし」は天に現れたが、それが象徴する出来事は地上で起こる。
 - *女は赤い竜によって苦しめられる。
- ⑤黙示録では、12:1以外に、「しるし」が6回現れる。
 - *12:3、13:13~14、15:1、16:14、19:20
- ⑥黙12:1の「しるし」は、「大いなる」という形容詞で他と区別されている。

(2) 「ひとりの女」について、さまざまな解釈がある。

- ①大患難時代の教会のことである。
 - *これは、置換神学の立場である。
 - *この立場では、教会は大患難時代の間、地上に存在することになる。
 - *しかし、教会がキリストを生んだのではない。その逆である。
- ②イエスを生んだマリアのことである。
 - *これは、カトリック教会の見解である。
 - *カトリックはマリアの無痛分娩を主張するが、女は陣痛を経験している。

(3) 「ひとりの女」の正しい解釈は、旧約聖書との関連から出て来る。

- ①「太陽を着て、月を足の下に踏み、頭には十二の星の冠をかぶっていた」
- ②創37:9~11

Gen 37:9 ヨセフはまた、ほかの夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、「また、私は夢を見ましたよ。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいるのです」と言った。

Gen 37:10 ヨセフが父や兄たちに話したとき、父は彼をしかって言った。「おまえの見た夢は、いったい何なのだ。私や、おまえの母上、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地に伏しておまえを拝むとでも言うのか。」

Gen 37:11 兄たちは彼をねたんだが、父はこのことを心に留めていた。

- ③太陽はヤコブ、月はラケル、11の星は11人の息子たちを象徴している。
- ④「ひとりの女」とは、イスラエルである。
 - *旧約聖書では、イスラエルは「ヤハウエの妻」として描かれる。

*イザ 54：5～6、エレ 3：6～8、31：32、エゼ 16：32、ホセ 2：16

⑤女の姿は、メシア的王国でのイスラエルの栄光に満ちた姿を預言している。

2. 2節

Rev 12:2 この女は、みごもっていたが、産みの苦しみと痛みのために、叫び声をあげた。

(1) イスラエルがメシアを生み出す前の状況を描写している。

- ①イスラエルの歴史が回顧されている。
- ②イスラエルは、メシア誕生の前に数々の苦難を経験した。

II. 赤い竜（3～4節）

1. 3節

Rev 12:3 また、別のしるしが天に現れた。見よ。大きな赤い竜である。七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。

(1) 「別のしるし」

- ①ここでの「しるし」は、大きな赤い竜である。
- ②先に行くと、赤い竜がサタンの象徴だということが明らかになる。
- ③赤は、血を流すのが好きなサタンの性質を表していると思われる。

(2) 「七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた」

- ①これは、異邦人の時代における最後の世界帝国の姿である（サタンが支配する）。
- ②7つの頭と、10本の角については、先に行ってから詳しく学ぶ。

2. 4節

Rev 12:4 その尾は、天の星の三分の一を引き寄せると、それらを地上に投げた。また、竜は子を産もうとしている女の前に立っていた。彼女が子を産んだとき、その子を食い尽くすためであった。

(1) サタンは、自分の支配下にあるすべての悪霊を動員し、メシアの業を妨害する。

- ①「天の星の三分の一」とは、墮落した天使の数である。悪霊の数。
- ②天使の三分の一が、サタンとともに墮落した。
- ③サタンは、メシア誕生に際して、悪霊どもを一か所に召集した。

(2) 竜は、女が子を産むのを待っている。

- ①その子をすぐに破壊するためである。
- ②ベツレヘムの出来事への言及である。

*ベツレヘムの2歳以下の男の子がすべて殺された。

③竜は、当時の覇権国ローマ帝国（サタンに支配されている）である。

④ヘロデ大王は、ローマ帝国の手先として動いた。

III. 男の子（5～6節）

1. 5節

Rev 12:5 女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもって、すべての国々の民を牧するはずである。その子は神のみもと、その御座に引き上げられた。

(1) 「女は男の子を産んだ」

①イスラエルはメシアを産んだ。

②ここで、メシアの誕生からメシアの昇天まで一挙に飛んでいる。

③「この子は、鉄の杖をもって、すべての国々の民を牧するはずである」

*「治めることになっていた」（新共同訳）

*「治めるべき者である」（口語訳）

④これは、詩2:9の預言の成就である。

(2) 「その子は神のみもと、その御座に引き上げられた」

①国々を統治する前に、天に引き上げられる。

②これは、メシアの昇天のことである。

③「男の子」を教会と解釈する人がいる。

*しかし、イスラエルが教会を産んだわけではない。

*また、教会はキリストの花嫁（女性形）であって男の子ではない。

*さらに、教会の使命は国々を統治することではない。

2. 6節

Rev 12:6 女は荒野に逃げた。そこには、千二百六十日の間彼女を養うために、神によって備えられた場所があった。

(1) ここで、場面は大患難時代に移行する。

①イスラエルは、荒野に逃げる。

②そこには、神によって備えられた場所があった。

③イスラエルはそこで1260日の間守られる。

*3年半である。

(2) イスラエルが荒野に逃げるタイミング

- ①7年の中間で、反キリストはイスラエルとの契約を破棄する。
- ②自分を神と宣言し、自分の像を神殿に置く(2テサ2:4)。
- ②マタ24:16

Mat 24:16 そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。

- *荒野と山は、同じ場所である。
- *そこは、(ボツラ) ペトラである。
- *ミカ2:12~13 参照

- (2) 5節と6節の間には、長い時間の経過がある。
 - ①教会時代は、この間に過ぎ去っている。
 - ②二重言及の法則に留意すること
 - *同じテーマであれば、時間の経過を無視して列挙される。
 - *旧約聖書のメシア預言は、初臨と再臨が続けて預言される。

結論:

1. 悪霊どもの活動について

- (1) 旧約時代における悪霊の働き
 - ①悪霊の働きは、ほんの数か所にしか出てこない。
- (2) 福音書の時代における悪霊の働き
 - ①悪霊の働きが頻繁に観察される。
 - ②サタンが、世界中にちらばっていた悪霊どもをイスラエルの地に召集した。
 - ③メシアの贖いの業を妨害するためである。
 - ④悪霊は、天使の3分の1の数存在する(黙12:4)。
- (3) 使徒の働き以降の時代になると、悪霊どもは旧約時代の状態に戻る。
 - ①世界中に散って行った。
- (4) 大患難時代になると、悪霊どもの活動が再び活発になる。
 - ①メシアの再臨を妨害するためである。
- (5) 歴史上起こったことを、そのまま私たちに適用してはならない。

2. サタンがイスラエルを破壊しようとする理由について

- (1) 旧約時代における反ユダヤ主義
 - ①イスラエルがメシアを産み出すことを妨害する行為である。
 - ②つまり、メシアの初臨を妨害する行為である。
- (2) 福音書における反ユダヤ主義

- ①メシアによる贖いの業を妨害する行為である。
 - ②メシアは、神が定めた時と方法で死ぬ必要があった。
 - *過越の祭りの時
 - *十字架によって
 - ③サタンは、それを妨害しようとした。
 - ④赤子のイエスを殺そうとした。
 - *赤子のイエスが死んでも、それは贖いの死ではない。
 - ⑤過越の祭り以外のタイミングで、イエスを殺そうとした。
- (3) 教会時代と大患難時代における反ユダヤ主義
- ①メシアの再臨を妨害する行為である。
 - ②イスラエルの民族的救いが、メシア再臨の条件である。
 - ③イスラエルを破壊すれば、メシアの再臨はなくなる。